

二十六夜

宮沢賢治

青空文庫

*

旧^{きゆう}曆^{れき}の六月二十四日の晩でした。

北^{きた}上^{かみ}川^{がみ}の水は黒の寒天よりももつとなめらかにすべり獅子鼻^{ししはな}は微^{かす}かな星のあかりの底にまつくろに突^つき出ていました。

獅子鼻の上の松^{まつ}林^{ばやし}は、もちろんもちろん、まつ黒でしたがそれでも林の中に入^いって行きますと、その脚^{あし}の長い松の木の高い梢^{こずえ}が、一本一本空の天^{あま}の川^{がわ}や、星座にすかし出されて見えていました。

松かさだか鳥だかわからない黒いものがたくさんその梢にとま

っているようでした。

そして林の底の萱かやの葉は夏の夜の雫しずくをもうポトポト落して居おりました。

その松林のずうつとずうつと高い処ところで誰たれかゴホゴホ唱なえていま
す。

「爾その時に疾翔しっしやう大力たいりき、爾迦夷るかいに告いげて曰いわく、諦あきらに聴きけ、諦きに
聴きけ、善よくこれを思念しんねんせよ、我なんじ今汝なんじに、梟きよう鷄もろもろ諸あくきんの惡あく禽きん、離り苦く
解脫げだつの道を述べん、と。

爾迦夷るかい、則すなわち、両りやう翼よくを開張うやうやし、虔くびしく頸くびを垂たれて、座はなを離はな
れ、低ひく飛揚ひやうして、疾翔しっしやう大力たいりきを讃嘆さんたんすること三さん匝そうにして、徐おもむろ
に座はなに復はし、拜跪はいきして唯願ただうらく、疾翔しっしやう大力たいりき、疾翔しっしやう大力たいりき、ただ我

等が為に、これを説きたまえ。ただ我等が為に、これを説き給えと。

疾翔大力、微笑して、金色の円光を以て頭に被れるに、その光、遍く一座を照し、諸鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、汝等審に諸の悪業を作る。或は夜陰を以て、小禽の家に至る。時に小禽、既に終日日光に浴し、歌唄跳躍して疲労をなし、唯唯甘美の睡眠中にあり。汝等飛躍してこれを握む。利爪深くその身に入り、諸の小禽、痛苦又声を発するなし。則ちこれを裂きて擅に噉食す。或は沼田に至り、螺蛤を啄む。螺蛤軟泥中にあり、心柔にして、唯温水を憶う。時に俄に身、空中にあり、或は直ちに身を破る、悶乱声を絶す。汝等

これを噉食するに、又懺悔ざんげの念あることなし。

斯かくごとの如ごときの諸の悪業、挙げて数うるなし。悪業を以ての故ゆえに、

更に又諸の悪業を作る。継起けいきして遂ついに竟おわることなし。昼は則ち日

光を懼おそれ又人及諸の強鳥を恐おそる。心暫しばらくも安らかなるなし、一ひとた

度梟きようしん身を尽して、又新あらたに梟身を得、審うつまびらかに諸の苦患を被りて、

又一尽ることなし。」

俄かに声が絶え、林の中はしいんとなりました。ただかすかな
かすかなすすり泣きの声が、あちこちに聞えるばかり、たしかに
それは梟ふくろうのお経きようだったのです。

しばらくたつて、西の遠くの方を、汽車のごうと走る音がしま
した。その音は、今度は東の方の丘おかに響ひびいて、ごんごんごんこ

だまをかえして来ました。

林はまたしずまりかえました。よくよく梢をすかして見ましたら、やっぱりそれは梟きょうでした。一疋ひきの大きなのは、林の中の一
番高い松の木の、一番高い枝えだにとまり、そのまわりの木のあちこちの枝には、大きなのや小さいのや、もうたくさんさんのふくろうが、じつととまってだまっていました。ほんのときどき、かすかなかすかなため息の音や、すすり泣きの声がするばかりです。

ゴホゴホ声が又起りました。

「ただ今のご文もんは、梟きょう 鷄し 守護章しゅごしょうというて、誰たれも存知しの有あり難がたいお経きやうの中の一とこじや。ただ今から、暫時しばしの間、そのご文の講釈かうしゃくを致いたす。みなみなの衆、ようく心を留とめて聞かしやれ。折角せつかく鳥に生

れて来ても、ただ腹が空いた、取つて食う、睡くなつた、巢に入るではなんの所詮しよせんもないことじゃぞよ。それも鳥に生れてただやすやすと生きるというても、まことはただの一日とても、ただごとではないのぞよ、こちらが一日生きるには、雀すずめやつぐみや、たにしまみずが、十や二十も殺されねばならぬ、ただ今のご文にあらしやるとおりじゃ。ここの道理をよく聴ききわけて、必らずうかうか短い一生をあだにすごすではないぞよ。これからご文に入るじゃ。子供らも、こらえて睡るではないぞ。よしか。」

林の中は又しいんとなりました。さっきの汽車が、まだ遠くの遠くの方で鳴つています。

「爾その時に疾翔しっしょう大力たいりき、爾迦夷るかいに告げて曰いわくと、まづ疾翔大力

とは、いかなるお方じやか、それを話さなければならんじや。

疾翔大力と申しあげるは、せしんだいばさつ施身大菩薩のことじや。もと鳥の

中から菩提心ぼだいしんを発して、ほつがん発願した大力の菩薩じや。疾翔とは

早く飛ぶということじや。しやしん捨身菩薩がもとの鳥の形に身をなし

て、空をお飛びになるときは、いちよう一揚というて、一はばたきに、

六千由旬ゆじゆんを行きなさる。そのいわれより疾翔と申さるる、大力

というは、お徳によつて、たとえ火の中水の中、ただこの菩薩を

念ずるものは、捨身大菩薩、必らず飛び込こんで、お救いになり、

その浄明じようみようの天上にお連れなさる、その時火に入つて身の毛一

つも傷きずかず、水に潜くぐつて、羽、塵ちりほどもぬれぬという、そのお徳

をば、大力とこう申しあげるのじや。されば疾翔大力とは、捨身

大菩薩を、鳥より申しあげる別号じゃ、まあそう申しては失礼なれど、鳥より仰あおぎ奉たてまつる一つのあだ名じやと、斯こう考えてよろしかろう。」

声がしばらくとぎれました。林はしいんとなりました。ただ下の北上川の淵ふちで、鱒ますか何かのはねる音が、バチャンと聞えたただけでした。

梟たいていの、きつと大僧正そうじょうか僧正そうじでしょう、坊ぼうさんの講義が又はじまりました。

「さらば疾翔大力は、いかなればとて、われわれ同様い賤やしい鳥の身分より、その様な結構のお身となられたか。結構のことじや。ご自分も又ほかの一切のものも、本願のごくにお救いなされる

ことなのじゃ。さほど尊いご身分にいかなことであられたかとな
 れば、なかなか容易のことではあらぬぞよ。疾翔大力さまはもと
 は一疋の雀でござらしやつたのじゃ。南天竺なんてんじくの、ある家の棟むねに
 棲すまわれた。ある年非常な饑饉ききんが来て、米もとれねば木の實もな
 らず、草さえ枯かれたことがござつた。鳥もけものも、みな飢うえ死
 にじや人もばたばた倒たおれたじや。もう炎天えんてんと飢渴きかつの為ために人にも
 鳥にも、親兄弟の見さかいなく、この世からなる餓鬼道がきどうじや。そ
 の時疾翔大力は、まだ力ない雀でござらしやつたなれど、つくづ
 くこれをご覧じて、世の浅間あさましさはかなさに、泪なみだをながしてい
 しゃれた。中にもその家の親子二人、子はまだ六つになるならず、
 母親とてもその大飢渴じきに、どこから食を得るでなし、もうあすあ

すに二人もろとも見す見す餓死を待ったのじゃ。この時、疾翔大力は、上よりこれをながめられあまりのことにしばしは途方とほうにくれなされたが、日ごろの恩を報ずるは、ただこの時と勇みたち、つかれた羽をうちのぼし、はるか遠くの林まで、親子の食じきをたずねたげな。一念天に届とどいたか、ある大林のその中に、名さえも知らぬ木なれども、色もおいもいと高き、十の木の実をお見附みつけなされたじや。さればもはや疾翔大力は、われを忘れて、十たびその実をおのがあるじの棟むねに運び、親子の上より落されたじや。その十たび目は、あまりの飢えと身にあまる、その実の重さにまなこもくらみ、五たび土に落ちたれど、ただ報恩の一念に、ついご自分にはその実を啄つばみなさならんだ、おもいとどいてその十番

目の実を、無事に親子に届けたとき、あまりの疲^{つか}れと張りつめた心のゆるみに、ついそのままにお倒れなされたじや。されどもやあつて正氣に復し下の模様を見てあれば、いかにもその子は勢^{せい}も増し、ただいたけなく悦^{よろこ}んでゐる如^{ごと}くなれども、親はかの実も自らは口にせなんじや、いよいよ餓^うえて倒れるようす、疾翔^{えじき}大力これを見て、はやこの上はこの身を以て親の餌食^{えじき}とならんものといきなり堅^{かた}く身をちぢめ、息を殺してはりより床^{ゆか}へと落ちなされたのじや。その痛さより、身は碎^{くだ}くるかと思えども、なおも命はあらしやつた。されども慈^じ悲^ひもある人の、生きたと見てはとても食^{とう}べはせまいとて、息を殺し眼^めをつぶつていられたじや。そしてとうとう願^くななつてその親子をば養^くわれたじや。その功德^{くどく}より、

疾翔大力様は、ついに仏にあわれたじや。そして次第に法力ほうりきを得て、やがてはさきにも申した如く、火の中に入れてもその毛一つも傷つかず、水に入れてもその羽一つぬれぬという、大力の菩薩さつとなられたじや。今このご文もんは、この大菩薩が、悪業あくごうのわれらをあわれみて、救護くごの道をば説かしやれた。その始めの方じやしばらく休んで次の講座で述べるといたす。

南無疾翔大力、南無疾翔大力。

みな衆しばらくゆるりとやすみなされ。」

いちばん高い木の黒い影が、ばたばた鳴って向うの低い木の方へ移ったようでした。やつぱりふくろうだったのです。

それと同時に、林の中は俄にわかにばさばさ羽の音がしたり、嘴くちばしの

カチカチ鳴る音、低くごろごろつぶやく音などで、一杯いっぱいになりました。天あまの川がわが大分まわり大熊星おおぐまぼしがチカチカまたたき、それから東の山脈の上の空はぼおつと古めかしい黄金きんいろに明るくなりしました。

前の汽車と停車場で交換こうかんしたのでしょうか、こんどは南の方へごとごと走る音がしました。何だか車のひびきが大へん遅おそく貨物列車らしかったのです。

そのとき、黒い東の山脈の上に何かちらつと黄いろな尖とがった変なかたちのものがあらわれました。梟ふくろうどもは俄にざわつとしました。二十四日の黄金きんの角つの、鎌かまの形の月だったのです。忽たちまちすうつと昇のぼってしまいました。沼ぬまの底の光のような朧おぼろな青いあかりがぼ

おつと林の高い梢こずえにそそぎ一疋の大きな梟が翅はねをひるがえしているのもひらひら銀いろに見えました。さっきの説教の松の木の間わりになった六本にはどれにも四疋から八疋ぐらいまで梟がとまっていた。低く出た三本のならんだ枝に三疋の子供の梟がとまっていました。きつと兄弟だったでしょうがどれも銀いろで大きさはみな同じでした。その中でこちらの二疋は大分厭あきていますよ。うでした。片つ方の翅をひらいたり、片脚かたあしでぶるぶる立ったり、枝へ爪つめを引っかけてくるつと逆さになって小笠原島おがさわらのこうもりのまねをしたりしていました。

それから何か云いっていました。

「そら、大の字やって見せようか。大の字なんか何でもないよ。」

「大の字なんか、僕^{ぼく}だってできらあ。」

「できるかい。できるならやってごらん。」

「そら。」その小さな子供の鼻はほんの一寸^{ちよつと}の間、消防のやるような逆さ大の字をやりました。

「何だい。そればつかしかい。そればつかしかい。」

「だって、やったんらしいんだろう。」

「大の字にならなかつたい。ただの十の字だつたい、脚が開かないじゃないか。」

「おい、おとなしくしろ。みんなに笑われるぞ。」すぐ上の枝に居たお父さんのふくろうがその大きなぎらぎら青びかりする眼でこつちを見ながら云いました。眼のまわりの赤い隈^{くま}もはつきり見

えました。

ところがなかなか小さな梟の兄弟は云うことをききませんでした。

「十の字、ほう、たての棒の二つある十の字があるだろうか。」

「二つに開かなかったい。」

「開いたよ。」

「何だ生意気な。」もう一疋は枝からとび立ちました。もう一疋もとび立ちました。二疋はばたばた、けり合ってはねが月の光に銀色にひるがえりながら下へ落ちました。

おつかさんのふくろうらしいさつきのお父さんのとならんでいた茶いろの少し小型のがすうつと下へおりて行きました。それか

ら下の方で泣声が起りました。けれども間もなくおつかさんの梟はもとの処へとびあがり小さな二足ものぼつて来て二足ともとのところへとまって片脚で眼をこすりました。お母さんの梟がも一度叱りました。その眼も青くぎらぎらしました。

「ほんとうにお前たちつたら仕方ないねえ。みなさんの見ていらつしやる処でもうすぐきつと喧嘩するんだもの。なぜ穂吉ちゃんのように、じつとおとなしくしていないんだらうねえ。」

穂吉と呼ばれた梟は、三足の中では一番小さいようでしたが一番温和おとなしいようでした。じつとまっすぐを向いて、枝にとまったまま、はじめからおしまいで、しんとしていました。

その木の一番高い枝にとまりからだ中銀いろで大きく頬ほおをふく

らせ今の講義のやすみのひまを水銀のような月光をあびてゆらりゆらりといねむりしているのはたしかに梟のおじいさんでした。

月はもう余程よほど高くなり、星座もずいぶんめぐりました。蝸座さそりざ

は西へ沈しずむとこでしたし、天の川もすっかり斜なめになりました。

向うの低い松の木から、さっきの年とし老りの坊さんの梟が、斜に

飛んでさっきの通り、説教の枝にとまりました。

急に林のざわざわがやんで、しずかにしずかになりました。風のためか、今まで聞えなかった遠くの瀬せの音が、ひびいて参りました。坊さんの梟はゴホンゴホンと二つ三つせきばらいをして又またはじめました。

「爾その時に、疾翔しっしょう大力たいりき、爾る迦夷かいに告げて曰いわく、諦あきらに聴きけ、諦

に聴け。善くこれを思念せよ。我今汝に、梟鷃諸の悪禽、離
くげだつ苦解脱の道を述べんと。

爾迦夷、則ち両翼を開張し、度しく頸を垂れて座を離れ、
るかるかい すなわりようよく

低く飛揚して疾翔大力を讃嘆すること三匝にして、徐に座に
ひようひよう

復し、拝跪して唯願うらく、疾翔大力、疾翔大力、ただ我等が為
はいきはいき ただただ

にこれを説き給え。ただ我等が為にこれを説き給えと。
たまたま

疾翔大力微笑して、金色の円光を以て頭に被れるに、その
みしようみしよう こんじきこんじき

光遍く一座を照し、諸鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、
あまねあまね かんぎじゆうまんかんぎじゆうまん

汝等審に諸の悪業を作る。或は夜陰を以て小禽の家に
なんじまびらかなんじまびらか あくごうあくごう あるいあるい やいんやいん しょうきんしょうきん

至る。時に小禽既に終日日光に浴し、歌唄跳躍して疲労をな
すですで かばいかばい ちようやくちようやく ひろうひろう

し、唯唯甘美の睡眠中にあり。汝等飛躍してこれを握む。利
ただただかんびただただかんび すいみんすいみん つかつか りり

爪そう深くその身に入り、諸の小禽痛苦又声を発するなし。則ちこれを裂さきて擅ほしいままに噉たんじき食す。或あるいは沼しょうでん田に至り、螺蛤らこうを啄ついばむ。螺蛤なんでい軟泥にゆうなん中にあり、心柔にゆうなんにして、唯温水を憶おもう。時に俄にわかに身空中にあり、或は直ちに身を破る、悶もんらん乱声を絶す。汝等これを噉たんじき食するに、又懺悔ざんげの念あることなし。

斯かくごとの如きの諸の悪業、挙げて数うるなし。悪業を以ての故ゆえに、更に又諸の悪業を作る。繼起けいきして遂ついに竟おわることなし。昼は則ち日光を懼おそれ、又人及諸の強鳥を恐おそる。心暫しばらくも安らかなることなし、一度ひとたび梟きようしん身を尽つくして、又新あらたに梟身を得つまびらか。審くげんに諸の苦患を被こうむりて又尽くることなし。で前の座では、捨身しゃしん菩薩ぼさつを疾翔しつしよう大力いりきと呼びあげるわけあい又、その願がんじよう成いんねんの因縁をお話

たしたじやが、次に爾迦夷るかいに告げて曰いわくとある。爾迦夷というは
 このとき我等と同様梟ふくろうじや。われらのご先祖と、一緒にお棲すまいな
 されたお方じや。今でも爾迦夷上しょうにん人と申しあげて、毎日十三
 日がご命日じや。いずれの家でも、梟の限りは、十三日には櫓ならの
 木の葉を取とて参まいて、爾迦夷上人さまにさしあげるといふことをや
 るじや、これは爾迦夷さまが櫓の木にお棲いなされたからじや。
 この爾迦夷さまは、早くから梟の身のあさましいことをご覚悟遊かくご
 ばされ、出離の道を求められたじやげなが、とうとうその一心の
 甲斐かいあつて、疾翔大力さまにめぐりあい、ついにその尊おしえい教を聴ち
 聞ようもんあつて、天上へ行かしやれた。その爾迦夷さまへのご説法
 じや。諦に聴け、諦に聴け。善くこれを思念せよと。心をしずめ

てよく聴けよ、心をしずめてよく聴けよと斯う^こじや。いずれの説法の座でも、よくよく心をしずめ耳をすまして聴くことは大切な^{うわ}のじや。上の空で聞いていたでは何にもならぬじや。」

ところがこのとき、さっきの喧嘩をした二足の子供のふくろうがもう説教を聴くのは厭^あきてお互^{たがい}にらめくらをはじめていました。そこは茂^{しげ}りあつた枝^{えだ}のかげで、まっくらでしたが、二足はどつちもあらんかぎりりと眼を開いていましたので、ぎろぎろ^{りん}燐を燃したように青く光りました。そこでとうとう二足とも一ぺんに噴^ふき出して一緒に、

「お前の眼は大きいねえ。」と云いました。

その声は幸^{さいわい}に少しつんぼの梟^{ぼう}の坊さんには聞えませんでした、

ほかの梟たちはみんなこつちを振り向きました。兄弟の穂吉という梟は、そこで大へんきまり悪く思つてもじもじしながら頭だけはじつと垂れていました。二足はみんなのこつちを見るのを枝のかげになつてかくれるようにしながら、

「おい、もう遁^にげて遊びに行こう。」

「どこへ。」

「実相寺の林さ。」

「行こうか。」

「うん、行こう。穂吉ちゃんも行かないか。」

「ううん。」穂吉は頭をふりました。

「我^{なんじ}今^{きょう}汝^{もろ}に、梟^{あくきん}鴟^{りく}諸^{げだつ}の悪禽、離苦解脱の道を述べんというこ

とは。」説教が又続きました。二足はもうそつと遁げ出し、穂吉はいよいよ堅^{かた}くなつて、兄弟三人分一人で聴こうという風でした。

*

その次の日の六月二十五日の晩でした。

丁度ゆうべと同じ時刻でしたのに、説教はまだ始まらず、あの説教の坊さんは、眼^めを瞑^{つぶ}つてだまつて説教の木の高い枝にとまり、まわりにゆうべと同じにとまつた沢^{たくさん}山^{ふくろう}の梟^{ふくろう}どもはなぜか大へんみな興奮している模様でした。女のふくろうにはおろおろ泣いているのもありましたし、男のふくろうはもうとても斯^こうしていら

れないというようにプリプリしていました。それにあのゆうべの三人兄弟の家族の中では一番高い処ところに居るおじいさんの梶はもうすっかり眼を泣きはらして頬が時々びくびく云い、泪なみだは声なくその赤くふくれた眼から落ちていました。

もちろんふくろうのお母さんはしくしくしく泣いていました。乱暴ものの二足の兄弟も不思議にその晩はきちんと座すわって、大きな眼をじつと下に落していました。又ふくろうのお父さんは、しきりに西の方を見ていました。けれども一体どうしたのかあの温和おとなしい穂吉の形が見えませんでした。風が少し出て来ましたので松まつの梢こずえはみなしずかにゆすれました。

空には所々雲もうかんでいるようでした。それは星があちこち

めくらにでもなったように黒くて光っていなかったからです。

俄かに西の方から一足の大きなかつしよく褐色の梟が飛んで来ました。

そしてみんなの入口の低い木にとまって声をひそめて云いました。

「やっぱり駄目だ。だめ穂吉さんももうあきらめているようだよ。さ

つきまではばたばた云っていたけれども、もう今はおと

なく白うすの上にとまっているよ。それから紐ひもが何だか変ったよう

だよ。前は右足だったが、今度は左ひだりあし脚あしに結ゆわいつけられて、そ

れに紐の色が赤いんだ。けれどもただひとついいことは、みんな

大抵たいてい寝ねてしまったんだ。さつきまで穂吉さんの眼を指で突つつ

こうとした子供などは、腹かけだけして、大の字になって寝てい

るよ。」

穂吉のお母さんの梶は、まるで火がついたように声をあげて泣きました。それにつれて林中の女のふくろうがみなしいんしいんと泣きました。

梶の坊さんは、じつと星ぞらを見あげて、それからしずかにたずねました。

「この世界は全くこの通りじゃ。ただもうみんなかなしいことばかりなのじゃ。どうして又あんなおとなしい子が、人につかまるような処に出たもんじゃろうなあ。」

説教の木となりねずみに居た鼠いろの梶はうやうや恭々しく答えました。

「今朝あけ方近くなってから、兄弟三人ででか出掛けたそうでございます。いつも人の来るような処ではなかったのでございます。そ

のうち朝日が出ましたので、眩^{まぶ}しさに三疋とも、しばらく眼を瞑^{つぶ}つていたそうでございます。すると、丁度子供が二人、草刈^{くさか}りに来て居ましたそうで、穂吉もそれを知らないうちに、一人がそつとのぼつて来て、穂吉の足を捉^{つか}まえてしまったと申します。」

「あああわれなことじゃ、ふびんはなしじゃ、あんなおとなしいいい子でも、何の因果じややら。できるなればわしなどで代つてやりたいじゃ。」

林はまたしいんとなりました。しばらくたつて、またばたばたと一疋の梟が飛んで戻^{もど}つて参りました。

「穂吉さんはね、臼の上をあるいていたよ。あの赤の紐を引き裂^さこうとしていたようだったけれど、なかなか容易じやないんだ。」

私はもう、どこか隙間から飛び込んで行って、手伝ってあげようと、何べんも何べんも家のまわりを飛んで見たけれど、どこにもあいてる所はないんだろう。ほんとうに可哀かあいそうだねえ、穂吉さんは、けれども泣いちゃいけないよ。」

梟のお母さんが、大きな眼を泣いてまぶしそうにしよぼしよぼしながら訊たずねました。

「あの家に猫ねこは居ないようでしたか。」

「ええ、猫は居なかったですよ。きっと居ないんです。ずいぶん暫しばらく、私はのぞいていたんですけれど、とうとう見えなかったのですから。」

「そんならまあ安心でございます。ほんとうにみなさまに飛んだ

ご迷惑めいわくをかけてお申し訳けもございません。みんな穂吉の不注
意からでございます。」

「いいえ、いいえ、そんなことはありません。あんな賢いかしこお子さ
んでも災難というものは仕方ありません。」

林中の女のふくろうがまるで口口に答えました。その音は二町
ばかり西の方の大きな藁屋根わらやねの中に捕とらわれている穂吉の処まで、
ほんのかすかにでしたけれども聞えたのです。

ふくろうのおじいさんが度々たびたび声がかすれながらふくろうのお
父さんに云いました。

「もうそうなつては仕方ない。お前は行つて穂吉にそつと教えて
やったらよからう、もうこの上は決してばたばたもがいたり、怒おこ

つて人に噛み付いたりしてはいけない。今日中誰もお前を殺さない処を見ると、きつと田螺か何かで飼つて置くつもりだろうから、今までのように温和おとなしくして、決して人に逆うな、とな。斯う云つて教えて来たらよからう。」

梟のお父さんは、首を垂れてだまつて聴きいていました。梟しょうの和尚しょうさんも遠くからこれにできるだけ耳を傾けていましたが大体そのわけがわかつたらしく言い添そえました。

「そうじゃ、そうじゃ。いい分別じゃ。序ついでに斯う教えて来なされ。このようなひどい目におうて、何悪いことしたむくいじやと、恨うらむようなことがあつてはならぬ。この世の罪も数知らず、さきの世の罪も数かぎりない事じゃほどこに、この災難もあるのじやと、

よくあきらめて、あんまりひとり嘆くでない、あんまり泣けば心も沈み、からだもとかく損ねるじや、たとえば足には紐があるとも、今ここへ来て、はじめてとまった処じやと、いつも気軽でいねばならぬ、とな、斯う云うて下され。ああ、されども、されども、とられた者は又別じや。何のさわりも無いものが、とや斯う言うても、何にもならぬ。ああ可哀そうなことじや不愍なことじや。」

お父さんの梶は何べんも頭を下げました。

「ありがとうございます。ありがとうございます。もうきつとそう申し伝えて参ります。斯んなお話を伝え聞いたら、もう死んでもよいと申しますでございましょう。」

「いや、いや、そうじや。斯うも云うて下され。いくら飼われる

ときまつても、子供心はもとより一向たよりないもの、又近くに
は猫犬なども居ることじゃ、もし万一の場合は、ただあの疾しつしよ翔うたいりき
大力のおん名を唱えなされとな。そう云うて下され。おお不慙
じゃ。」

「ありがとうございます。では行つて参ります。」

梶のお母さんが、泣きむせびながら申しました。

「ああ、もしどうぞ、いのちのある間は朝夕二度、私に聞えるよ
う高く啼ないて呉くれとおっしゃつて下さいませ。」

「いいよ。ではみなさん、行つて参ります。」

梶のお父さんは、二三度羽ばたきをして見てから、音もなく滑すべ
るように向うへ飛んで行きました。梶の坊さんがそれをじつと見

送っていました、俄かにからだをりんとして言いました。

「みな衆。いつまで泣いてもはてないじゃ。ここの世界は苦界くがい

という、又忍土またにんどとも名づけるじゃ。みんなせつないことばかり、

涙なみだの乾くひまはないのじゃ。ただこの上は、われらと衆生しゅじょうと、

早くこの苦を離はなれる道を知るのが肝要かんようじゃ。この因縁いんねんでみな

の衆も、よくよく心をひそめて聞きなされ。ただ一人でも穂吉の

ことから、まことに菩提ぼだいの心を発すなれば、穂吉の功德くどく又この座

のみな衆の功德、かぎりもあらぬことなれば、必らずとくと聴ち

ようもん

聞なされや。昨夜の続きを講じます。

爾その時に疾翔しつしよう大力たいりき、爾迦夷るかいに告げて曰く、諦いに聴あきらけ、諦かに

聴きけ。善よくこれを思念せよ。我今汝なんじに、梟鵂きようもろもろ諸の悪禽あくきん、離苦りく

解脱げだつの道を述べんと。

爾る迦夷かいすなわ、則すなわち両りよう翼よくを開張うやうやし、虔くびしく頸くびを垂たれて座はなを離はなれ、

低ひく飛揚ひようして疾翔さんたん大力さんたんを讃嘆さんたんすること三さん匝そうにして、徐おもむろに座はなに

復はし、拜跪はいきして唯願ただうらく、疾翔さんたん大力さんたん、疾翔さんたん大力さんたん、ただ我等らが為ため

にこれを説たまき給たまえ。ただ我等らが為ためにこれを説たまき給たまえと。

疾翔さんたん大力さんたん微笑みしょうして、金こん色じきの円光えんこうを以もつて頭こうべに被かぶれるに、その

光あまね遍あまねく一座いざを照あし、諸鳥しよきう歡喜かんぎ充じゆう満まんせり。則すなわち説たまいて曰いはく、

汝等なんじら審しんに諸しよの惡業あくごふを作る。或あるは夜陰やいんを以もつて小しょう禽きんの家けに至いたる。

時に小禽しょうきん既すでに終日日光しゅうじつにくわうに浴よくし、歌唄かばい跳ちよう躍やくして疲勞ひろうをなし、

唯ただ甘美かんびの睡すい眠みん中にあり、汝等なんじら飛躍ひやくしてこれを握つかむ。利爪りそう深しん

くその身みに入り、諸しよの小禽しょうきん痛苦ぶくう又また聲こゑを発はするなし。則すなわちこれを裂さ

ほしいまたんじき
きて擅に噉食す。或は沼田に至り螺蛤を啄む。螺蛤軟泥
中にあり、心柔にゆうなんにして唯温水を憶う。時に俄に身空中にあ
り、或は直ちに身を破る、悶乱もんらん声を絶す。汝等これを噉食す
るに、又懺悔ざんげの念あることなし。

斯かくの如きの諸の悪業、挙げて数うるなし。

悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作る。継起けいきして遂に竟る
ことなし。昼は則ち日光を懼れ、又人及諸の強鳥を恐る。心暫ら
くも安らかなることなし。一度梟身きようしんを尽して、又新に梟身
を得、審に諸の患難かんなんを被りて、又尽くることなし。

で前の晩は、諸鳥歡喜充滿せりまで、文の如くに講じたが、此
の席はその次じや。則ち説いて曰くと、これは疾翔大力さまが、

爾迦夷るかい 上しょうにん 人ひと のご懇請こんせい によつて、直ちに説法をなされたと斯
 うじゃ。汝等つまびらか 審に諸の悪業を作ると。汝等というは、元來はわれ
 われ梟ふくろうとび や鵒とび などに対して申さるるのじゃが、ご本意は梟にあるの
 じゃ、あとのご文の罪相を拝するに、みなわれわれのことじゃ。
 悪業というは、悪は悪いじゃ、業ごう とは梵語ぼんご でカルマというて、す
 べて過去になしたることのまだ報むくい となつてあらわれぬを業という、
 善業悪業あるじゃ。ここでは悪業という。その事柄ことがら を次にあげ
 なされたじゃ。或は夜陰を以て、小禽みずか の家に至ると。みな衆、
 他人事ひとごと ではないぞよ。よくよく自らの胸みぞ にたずねて見なされ。夜
 陰とは夜のくらやみじゃ。以てとは、これに乗じてというがよう
 の意味じゃ。夜のくらやみに乗じてと、斯うじゃ。小禽の家に至

る。小禽とは、すずめ雀、やまがら山雀、しじゅうから四十雀、ひわ、もず百舌、みそさぎい、かけす、つぐみ、すべて形小にして、力ないものは、みな小禽じや。その形小さく力無い鳥の家に参るといふのじやが、参るといふてもただ訪ねて参るでもなければ、遊びに参るでもないじや、内に深く残忍の想をひそ潜め、外又恐るべく悲しむべき夜叉相をやしやそう浮べ、密ひそやかにしの忍んで参ると斯う云うことじや。このご説法のころは、われらの心も未だいま仲々善心もあつたじや、小禽の家に至るとお説きなされば、はやちようほう聴法の者、みなりつぜん慄然として座に耐たえなかつたじや。今は仲々そうでない。今ならば疾翔大力さま、まだまだ強くはげ烈しくご説法であらうぞよ。みな衆、よくよく心にしみて聞いて下され。

次のご文は、時に小禽すで既に終日日光に浴し、歌唄跳躍して、疲労をなし、唯々甘美の睡眠中にあり。他人事ではないぞよ。どうじゃ、今朝も今朝とて穂吉ところどの処を替かえてこの身の上じゃ、」

説教の坊さんの声が、俄にわかにおろおろして変りました。穂吉のお母さんの梶はまるで帛きぬを裂さくように泣き出し、一座の女の梶は、たちまちそれに従ついて泣きました。

それから男の梶も泣きました。林の中はただむせび泣く声ばかり、風も出て来て、木はみなぐらぐらゆれましたが、仲々誰たれも泣きやみませんでした。星はだんだんめぐり、赤い火星ももう西ぞらに入りました。

梶の坊さんはしばらくゴホゴホ咳せき嗽せきをしていましたが、やっと

心を取り直して、又講義をつづけました。

「みなための衆、まず試しに、自分がみそさざいにでもなつたと考え
てろうご覧じ。な。天道さまてんとうが、東の空へこんじき金色の矢を射なさるじ
や、林樹は青く枝はえだ揺るる、楽しく歌をばうたうのじや、仲よく
おうた友だちと、枝から枝へ木から木へ、天道さまの光の中を、
歌つて歌つて参るのじや、ひるごろならば、涼しいすず葉陰にはかげしばし
やすんでだま黙るのじや、又ちちと鳴いて飛び立つじや、空の青板を
めざすのじや、又小流れに参るのじや、心の合うた友だちと、た
だしば暫らくも離れずに、歌つて歌つて参るのじや、さてお天道さま
が、おかくれなされる、からだはつかれてとろりとなる、油のご
とく、溶けるとごとくじや。いつかまぶたは閉じるのじや、昼の景

色を夢見る^{ゆめ}じや、からだは枝に留^{とど}まれど、心はなおも飛びめぐる、
 たのしく甘い^{あま}つかれの夢の光の中じや。そのとき俄かにひやりと
 する。夢かうつつか、愕^{おどろ}き見れば、わが身は裂けて、血は流れる
 じや。燃えるようなる、二つの眼^めが光つてわれを見詰^{みつ}むるじや。
 どうじや、声さえ発^たとうにも、咽喉^{のど}が狂うて音が出ぬじや。これ
 が則^{すなわ}ち利爪^{りそう}深くその身に入り、諸^{もろもろ}の小禽痛苦又声を発するなしの
 意なのじやぞ。されどもこれは、取らるる鳥より見たるものじや。
 捕^とる此方^{こなた}より眺^{なが}むれば、飛躍してこれを握^{つか}むと斯^こうじや。何の罪
 なく眠れるものを、ただ一打^{ひとつち}ととびかかり、鋭^{すど}い爪^{つめ}でその柔^{やわらか}な
 身体^{からだ}をちぎる、鳥は声さえよう発てぬ、こちらはそれを嘲^{あざわら}笑い
 つつ、引き裂くじや。何たるあわれのことじや。この身とて、今

は法師にて、鳥も魚も襲^{おそ}わねど、昔^{むかし}おもえば身も世もあらぬ。あ
あ罪^{ざい}業^{ごう}のこのからだ、夜^よ毎^{ごと}夜^{ごと}毎^{ごと}の夢^{ゆめ}としては、同じく夜叉の業を
なす。宿^{しゆく}業^{ごう}の恐ろしさ、ただただ呆^{あき}るるばかりなのじゃ。―

風がザアツとやって来ました。木はみな波のようにゆすれ、坊
さんの梟も、その中に漂^{ただよ}う舟^{ふね}のようにうごきました。

そして東の山のはから、昨日^{きのう}の金角、二十五日のお月さまが、
昨日よりは又ずうつと瘠^やせて上りました。林の中はうすいうすい
霧^{きり}のようなものでいっぱいになり、西の方からあの梟のお父さん
がしよんぼり飛んで帰って来ました。

*

きゆうれき
旧 曆

六月二十六日の晩でした。

そらがあんまりよく霽はれてもう天あまの川がわの水は、すっかりすきとおつて冷たく、底のすなごも数えられるよう、またじつと眼をつぶっていると、その流れの音さえも聞えるような気がしました。けれどもそれは或あるは空の高い処を吹いていた風の音だったかも知れません。なぜなら、星がかげろうの向う側にでもあるように、少しゆれたり明るくなったり暗くなったりしていましたから。

獅子鼻ししはなの上の松まつ林ばやし

には今夜も梟の群が集まりました。今夜

は穂吉が来ていました。来てはいましたが一昨日おとといの晩の処にでなしに、おじいさんのとまる処よりももっと高いところで小さな枝

の二本行きちがい、それからもつと小さな枝が四五本出て、一寸盃さかずきのような形になった処へ、どこから持つて来たか藁屑わらくずや髪かみの毛などを敷しいて臨時に巢すがつくられていました。その中に穂吉が半分横になつて、じつと目をつぶっていました。梟のお母さんと二人の兄弟とが穂吉のまわりに座すわつて、穂吉のからだを支えるようにしていました。林中のふくろうは、今夜は一人も泣いてはいませんでしたおこが怒おこっていることはみんな、昨夜ゆうべどこではありませんでした。

「傷いたみはどうじゃ。いくらか薄うすらいだかの。」

あの坊さんの梟がいつもの高い処からやさしく訊たずねました。穂吉は何か云いおうとしたようでしたが、ただ眼がパチパチしたばかり

り、お母さんが代つて答えました。

「折角せつかくこらえているようでございます。よく物が申せないの
 ございます。それでもどうしても、今夜のお説教を聴ちやうもん聞いた
 したいというようでございますので。もうどうかかまわずご講
 義をねがいとう存じます。」

梟の坊さんは空を見上げました。

「殊しゆしやう勝こころがなお心掛けじや。それなればこそ、たとえ脚あしをば折
 られても、二度と父母の処へも戻もどつたのじや。なれども健すこやかな二
 本の脚を、何面白おもしろいこともないに、振ねじつて折つて放すとは、何
 という浅間あさましい人間の心じや。」

「放されましても二本の脚を折られてどうしてまあすぐ飛べまし

よう。あの萱原かやはらの中に落ちてひいひい泣いていたのでございま

す。それでも昼の間は、誰もたれ気付かずやつと夕刻、私が顔を見よ

うと出て行きましたらこのていたらくでございまする。」

「うん。もつとも尤じや。なれども他人は恨むうらものではないぞよ。みな自みずか

らかもとなのじや。恨みの心は修羅しゆらとなる。かけても他人は恨む

でない。」

穂吉はこれをぼんやり夢のように聞いていました。子供がもう厭あきて「遁にがしてやるよ」といって外へ連れて出たのでした。そのとき、ポキツと脚を折ったのです。その両脚は今でもまだしんと痛みます。眼を開いてもあたりがみんなぐらぐらして空さえ高くなったり低くなったりわくわくゆれているよう、みんなの

声も、ただぼんやりと水の中からでも聞くようです。ああ僕はきつともう死ぬんだ。こんなにつらい位ならほんとうに死んだ方がいい。それでもお父さんやお母さんは泣くだろう。泣くたつて一体お父さんたちは、まだ僕の近くに居るだろうか、ああ痛い痛い。穂吉は声もなく泣きました。

「あんまりひどいやつらだ。こつちは何一つ向うの為^{ため}に悪いようなことをしないんだ。それをこんなことをして、よこす。もうだまつてはいられない。何かし返ししてやろう。」一疋^{びき}の若い梟^{ふくろう}が高く云いました。すぐ隣^{となり}りののが答えました。

「火をつけようじゃないか。今度屑^{くず}焼^やきのある晩に燃えてる長い藁^{わら}を、一本あの屋根までくわえて来よう。なあに十本も二十本も

運んでいるうちにはどれかすぐ燃えつくよ。けれども火事で焼けるのはあんまり楽だ。何かもう少しひどいことがないだろうか。」
又その隣りが答えました。

「戸のあいてる時をねらって赤子の頭を突いてやれ。畜生め。」

梟の坊^{ぼう}さんは、じつとみんなの云うのを聴^きいていましたがこの時しずかに云いました。

「いやいや、みな衆、それはいかぬじや。これほど手ひどい事なれば、必らず仇^{あだ}を返したいはもちろんの事ながら、それでは血で血を洗うのじや。こなたの胸が霽^はれるときは、かなたの心は燃えるのじや。いつかはまたもつと手ひどく仇を受けるじや、この

身終つて次の生しよまで、その妄もう執しゆうは絶えぬのじゃ。遂ついには共に修羅しゆらに入り闘とう諍そうしばらくもひまはないじゃ。必らずともにさよ
うのたくみはならぬぞや。」

けたたましくふくろうのお母さんが叫さけびました。

「穂吉穂吉しつかりおし。」

みんなびくつとしました。穂吉のお父さんもあわてて穂吉の居た枝に飛んで行きましたがとまる所がありませんでしたからすぐその上の枝にとまりました。穂吉のおじいさんも行きました。みんなもまわりに集りました。穂吉はどうしたのか折られた脚をぶるぶる云わせその眼は白く閉じたのです。お父さんの鼻は高く叫びました。

「穂吉、しつかりするんだよ。今お説教がはじまるから。」

穂吉はパチツと眼をひらきました。それから少し起きあがりました。見えない眼でむりに向うを見ようとしているようでした。

「まあよかったね。やっぱりつかれているんだろう。」女の梟たちは云い合いました。

坊さんの梟はそこで云いました。

「さあ、講釈をはじめよう。みな衆座にお戻りなされ。今夜は二十六日じや、来月二十六日はみな衆も存知の通り、二十六夜待ちじや。月がつてんし天子山のはを出いでんとして、光を放ちたまうとき、疾しつしょうたいりき翔る大力かい、爾迦夷波羅夷はらいの三尊さんぞんが、東のそらに出現たまします。今宵こよいは月は異なれど、まことの心には又あらはれ給たまわぬこと

でない。穂吉どのも、ただ一途いちずに聴聞の志じやげなで、これからさつそく講ずるといたそう。穂吉どの、さぞ痛かろう苦しかろう、お経の文とて仲々耳には入るまいなれど、そのいたみ悩みの心なやの中に、いよいよ深く疾翔大力さまのお慈悲じひを刻みつけるじやぞ、いいかや、まことにそれこそ菩提ぼだいのたねじや。」

梶の坊さんの声が又少し変りました。一座はしいんとなりました。林の中にもう鳴き出した秋の虫があります。坊さんはしばらく息をこらして気を取り直しそれから厳めしい声いかで願をたててから昨夜の続きをはじめました。

「梶きようし 鷄くご救護章 梶鷄救護章

諸もろもろの仁じん者しゃ掌てを合せて至心に聴きき給え。我今疾翔しっしょう大力たいりきが威

神力じんりきを享うけて梟鷁救護章の一節を講ぜんとす。唯願ただうらくはか

の如に来によらい大慈大悲我が小願の中に於おいて大神力を現じ給い妄言綺もうげんき

語ごの淤泥おでいを化けして光明けんじき顯色じようりの淨瑠璃となし、浮華ふかの中より清し

淨ようじようの青蓮華しようれんげを開かしめ給わんことを。至心欲願、南無仏南

無仏南無仏。

爾その時に疾翔大力、爾るか迦夷かいに告げて曰いわく、諦あきらに聴け諦に聴け。

善よくこれを思念せよ。我なんじ今汝に梟鷁諸の惡あくきん禽離苦解脱の道を述

べんと。

爾迦夷すなわ則りちようよく 両翼うやうやを開張し、虔くびしく頸くびを垂れて座を離れ、低

く飛揚ひようして疾翔大力を讃嘆さんたんすること三さん匝そうにして、徐おもむろに座に復

し、拜跪はいきして願はうらく疾翔大力、疾翔大力、ただ我等らが為ためにこれ

を説き給え。ただ我等が為にこれを説き給えと。

疾翔大力、微笑^{みしょう}して金色^{こんじき}の円光^{えんこう}を以て頭に被^{かぶ}れるに、諸鳥

歡喜^{かんぎ}充^{じゅう}満^{まん}せり。則ち説いて曰く、

汝等審^{つまびら}に諸^{あくごう}の惡業^{あくごう}を作る。或は夜陰^{やいん}を以て小禽^{しょうきん}の家に至

る。時に小禽^{すで}既に終日日光に浴し、歌唄^{かばい}跳躍^{ちようやく}して疲労をなし、

唯^{ただ}唯^{ただ}甘美^{かんび}の睡眠^{すいみん}中にあり、汝等飛躍してこれを握^{つか}む。利爪^{りそう}深

くその身に入り、諸の小禽痛苦又声を発するなし、則ち^{すなわ}これを裂^さ

きて擅^{ほしいまま}に噉^{たん}食^{じき}す。或は沼田^{しょうでん}に至り、螺蛤^{らこう}を啄^つむ。螺蛤^{なん}軟

泥中^いにあり、心柔^{にゅうなん}にして唯温水を憶^{おも}う。時に俄^{にわか}に身空中

にあり、或は直ちに身を破る、悶乱^{もんらん}声^{こゑ}を絶す。汝等これを噉食

するに、又懺悔^{ざんげ}の念あることなし。

悪業あくごうを以ての故ゆえに、更に又諸の悪業を作る。継起けいきして遂ついに竟おわることなし。昼は則ち日光を懼おそれ又人及諸の強鳥を恐おそる。心暫しばらくも安らかなることなし。一度ひとたび梟身きようしんを尽つくして、又新あらたに梟身きようしんを得うつまびらか。審かんなんに諸の患難こうむを被りて、又尽くることなし。

で前の晩は、斯かくの如ごときの諸の悪業、挙げて数うることなし、ま
で講じたが、今夜はその次じゃ。

悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作ると、これは誠まことに短みづかいながら、強いお語ことばじゃ。先刻人間に恨みを返すとの議があつた節、申した如くじゃ、一の悪業によつて一の悪果を見る。その悪果故に、又新なる悪業を作る。斯の如く展転して、遂ついにやむときないじゃ。車輪のめぐれどもめぐれども終らざるが如くじゃ。これを

輪廻りんねといい、流転るてんという。悪より悪へとめぐることにじや。繼起し
 て遂ついに竟おわることなしと云うがそれじや。いつまでたつても終りに
 ならぬ、どこどこまでも悪因悪果、悪果によつて新に悪因をつく
 る。な。斯こうじや、浮うかむ瀬せとてもあるまいじや。昼は則ち日光を
 懼おそれ、又人及諸およびの強鳥を恐る。心暫しばらくも安らかなることなし。
 これは流転の中の、つらい模様をわれらにわかるよう、直じかに申
 されたのじや。勿もつた体なくも、我等は光明の日天子にってんしをば憚はばかり
 奉たてまつる。いつも闇やみとみちづれじや。東の空が明るくなりて、日天子
 さまの黄金きんの矢が高く射出さるれば、われらは恐れて遁にげるのじ
 や。もし白昼にまなこを正しく開くならば、その日天子の黄金の
 征矢そやに伐うたれるじや。それほどまでに我等は悪業あくごうの身じや。又

人及諸の強鳥を恐る。な。人を恐るることは、今夜今ごろ講ずることの限りでない。思い合せてよろしかろう。諸の強鳥を恐る。鷹^{たか}やはやぶさ、又さほど強くはなけれども日中なれば鳥^{からす}などまで恐れねばならぬ情ない身じゃ。はやぶさなれば空よりすぐに落ちて来て、こなたが小鳥をつかむときと同じようなるありさまじゃ、たちまち空で引き裂かれるじゃ、少しのさからいをしたとて、何にもならぬ、げにもげにも浅間^{あさま}しくなさけないわれらの身じゃ。ふくろう 梟^{ちよつと}の坊さんは一寸声を切りました。今夜ももう一時の上りの汽車の音が聞えて来ました。その音を聞くと梟どもは泣きながらも、汽車の赤い明るいならんだ窓のことを考えるのでした。講釈がまた始まりました。

「心しば暫らくも安らかなることなしと、どうじや、みなの人衆、ただ
 の一時いつときでも、ゆつくりと何の心配もなく落ち着いたことがある
 かの。もういつでもいつでもびくびくものじや。一度ひとたび梟身きようしん
 を尽して又新あらたに梟身を得うと斯こうじや。泣いて悔くやんで悲しんで、
 ついには年老としとる、病氣になる、あらんかぎりの難儀なんぎをして、それ
 で死んだら、もうこの様な悪鳥の身を離れるかとならば、仲々そ
 うは参らぬぞや。身に染しみ込んだ罪業ざいごうから、又梟に生れるじや。
 斯かくごとの如くにして百生しやう、二百生、乃至劫ないしこうをも亘わたるまで、この梟身を
 免まぬかれぬのじや。審つまびらかに諸の患難こうむを蒙りて又尽くることなし。もう何
 もかも辛いつらことばかりじや。さて今東の空は黄金色きんいろになられた。
 もう月天子がつてんしがお出ましなのじや。来月二十六夜ならば、このお

光に疾翔しつしやうたいりき大力さまを拝み申すじやなれど、今宵こよいとて又拝み申さぬことでない、みな衆、ようくまごころを以て仰あおぎ奉るじや

。ー

二十六夜の金いろの鎌かまの形のお月さまが、しずかにお登りになりました。そこらはぼおつと明るくなり、下では虫が俄にわかにしいんと鳴き出しました。

遠くの瀬の音もはつきり聞えて参りました。

お月さまは今はすうつと桔梗ききよういろの空におのぼりになりました。それは不思議な黄金きんの船のように見えました。

俄かにみんなは息がつまるように思いました。それはそのお月さまの船の尖とがつた右のへさきから、まるで花火のように美しい紫むらさき

いろのけむりのようなものが、ばりばりばりと噴き出たからです。けむりは見る間にたなびいて、お月さまの下すっかり山の上に目もさめるような紫の雲をつくりました。その雲の上に、金いろの立派な人が三人まっすぐに立っています。まん中の人はせいも高く、大きな眼でじつとこつちを見えています。衣のひだまで一一はつきりわかります。お星さまをちりばめたような立派な璣ようらくをかけていました。お月さまが丁度その方の頭のまわりに輪になりました。

右と左に少し丈たけの低い立派な人が合がっしょう掌しょうして立っていました。その円光はぼんやり黄金きんいろにかすみうしろにある青い星も見えました。雲がだんだんこつちへ近づくようです。

「南無疾翔大力、南無疾翔大力。」
なむしつしょうたいりき

みんなは高く叫びました。その声は林をとどろかしました。雲がいよいよ近くなり、捨身菩薩しゃしんぼさつのおからだは、十丈ばかりに見えそのかがやく左手がこつちへ招くように伸びたと思ふと、俄に何とも云えないいいかおりがそこらいちめんにして、もうその紫の雲も疾翔大力の姿も見えませんでした。ただその澄み切った桔梗いろの空にさっきの黄金きんいろの二十六夜のお月さまが、しずかにかかっているばかりでした。

「おや、穂吉さん、息つかなくなつたよ。」俄に穂吉の兄弟が高く叫びました。

ほんとうに穂吉はもう冷たくなって少し口をあき、かすかにわ

らったまま、息がなくなっていました。そして汽車の音がまた聞えて来ました。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2009年4月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

二十六夜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>